様式Ｃ－１９

# 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年５月３０日現在

機関番号：３４５０４
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2011
課題番号：２１５２０７００
研究課題名（和文）　日韓仏教儀礼の比較史的研究－１６・１７世紀の薦度儀礼と仏画

研究課題名（英文）　The comparative studies of Korean-Japanese rituals in Buddhism —Sendo rituals and Buddha painting in 16,17th century

研究代表者
西山　克（NISHIYAMA MASARU）
関西学院大学・文学部・教授
研究者番号：30145825

研究成果の概要（和文）：日本の十界図・六道絵・地獄絵の世界で、研究史上特異な位置を占める熊野観心十界図は、１６・１７世紀の境にその原図が制作された。制作の直接の機縁となったのは、朝鮮社会で制作された甘露図が、豊臣秀吉の東アジア再編計画を通して日本社会に流入したことにある。甘露図は水陸会の儀礼の過程とその実修される場を、救済対象である死者の多様な死に様とともに描いた絵図であり、１６世紀半ばに成立したものと思われる。１６世紀の東アジアが孤魂薦度の儀礼を共通して必要とした理由（戦争・党争・疾疫・飢饉など）と、その儀礼の内容の地域的な偏差が明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：
Kumanokanjinjikkaizu is occupied the specific position in the study history of Japanese Jikkaizu,Rokudoue and Jigokue,the original drawing was produced in the boundary of 16-17 centuries.It is the direct background of production,that Kanrozu(Korean Nectar Ritual Painting) produced in Korea society flowed into the Japan society because the plan of East Asia reorgnization by Toyotomi Hideyoshi. Kanrozu(Korean Nectar Ritual Painting) represents the rituals in Suirikue with painting of various ways of the dying(who targeted for relief).It was established at the mid-16th century.I show a reason(including war,interparty strife, an epidemic,the famine)why East Asia of the 16th century needed the rituals of Kokonsendo and the regional deviation of the rituals.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| ２００９年度 | 1,300,000 | 390,000 | 1,690,000 |
| ２０１０年度 | 900,000 | 270,000 | 1,170,000 |
| ２０１１年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総　計 | 2,700,000 | 810,000 | 3,510,000 |

研究分野：　人文学
科研費の分科・細目：史学・日本史
キーワード：熊野観心十界図・甘露図（甘露幀）・水陸画・薦度儀礼・水陸会・施餓鬼

１．研究開始当初の背景

（１）　熊野観心十界図は説話文学の研究者の研究領域にあり、例外的な研究を除けば、歴史学的なアプローチの対象ではなかった。美術史の対象ですらなかった。例外的な研究も説話文

学の研究に近似しており、決して熊野観心十界図の背後に国家や社会の構造や変容を想定するものではなかった。

（２） 朝鮮仏画である甘露図を熊野観心十界図と結びつけ、東アジアにおける水陸会（大施餓鬼）の普遍性からこれを読み解く発想はほとんどなかった。甘露図の研究は韓国で急速に発展したが、その研究は美術史的な研究がほとんど全てで、次項の中国水陸画との比較もその領域の範囲内で行われていたに過ぎない。その背後に国家や社会、宗教を想定する志向そのものがなかったのである。

（３） 熊野観心十界図を研究する際に、中国明代の水陸画を考察の対象に含める発想もまれであった。釈迦十大弟子の一人阿難と鬼神との出会いを起源とする施餓鬼・水陸会は宋代の江南地方から広がっていくが、多くは多量の連幅として制作される水陸画は、その儀礼の場を荘厳することを義務づけられている。その水陸画の明代の作例を、「絵の居場所」の異なる熊野観心十界図と比較しようという試みは、研究代表者の旧作を除外すると全く存在していなかった。

（４） １６・１７世紀の東アジアの国家と社会が、そしてもちろん宗教（仏教・道教・儒教）が、不遇の最期を遂げ満たされぬ孤魂の救済にどのように関与したのかについての研究は全くといってよいほどなかった。

２．研究の目的

東アジアを構成する大陸・半島・列島に成立した国家と社会が、不遇な死者＝孤魂の救済にどのように関与したのか。それを熊野観心十界図と甘露図、そして水陸画の比較と翻案過程を通して検討する。それは熊野観心十界図・甘露図・水陸画という制作背景も機能も異なる三つの絵画の歴史学的研究であると同時に、１６・１７世紀における東アジアの国家・社会・宗教・絵画・文芸を、孤魂の救済をキーワードに総合的に問いなおす試みでもある。

３．研究の方法

研究の方法を具体的に示す。

（１）熊野観心十界図・甘露図・水陸画の遺存例を実見し、まずは絵画史料論的考察を加える。三者とも祖本にあたる原図は確認されておらず、また絵相の変容が激しいのを特徴とする。そのためにできるだけ多くの現存作例を実見することがのぞましい。日本において個別具体的な研究の乏しい甘露図の諸作例（主に１６世紀成立）については、微細な表現に含意された意味を見落とさないように描き起こし図を作成する必要がある。絵画史料論的考察を行う際には、これらの絵画に先行する仏画や道釈画などとの比較が重要である。熊野観心十界図の場合は特に六道絵・地獄絵など、１６世紀以前の他界観・業罰観を示す絵画との比較検討が重要になる。と同時に、熊野観心十界図の影響下に成立した諸作例－京都禅林寺の六道十王図など－との比較も、熊野観心十界図の社会的な受容を考えるために必要となる。

（２）特にそれらの宗教画の背後にある水陸会という仏教（一部道教）儀礼の過程と意味を、聖教テクストの解読を通して復元する必要があるだろう。水陸会マニュアルは１５世紀以降の朝鮮社会で様々に版行されている。その聖教テクストの実修（儀礼の実修は文字テクスト＝マニュアルの「幻想」による実体化である）を予想しつつ、絵画の細部を読み解く必要がある。これは儀礼を体現する導師・梵唄僧の体験を再現する作業であると同時に、その水陸会の場に立ち会う遺族や信者の体験を復元する作業でもある。また甘露図のように儀礼の過程と装置自体を描き込み、寺院の霊壇に奉懸される場合、それは甘露図に供物と灯明をあげて拝礼する遺族や信者の体験を再現する作業であるともいえる。

（３）１６世紀後半から１７世紀前半という時期の、各地域における孤魂薦度の有り様を検討する。水陸画や甘露図はその制作された社会の全身分―皇帝から放浪する芸能民まで－を救済の対象とする。ただ、甘露図は不遇・非業の最期を遂げた民衆の孤魂の救済に比重がかかっている。豊臣秀吉による文禄・慶長の役がその甘露図の日本流入に決定的な意味をもったことを勘案すれば、秀吉による京都方広寺（善光寺如来堂）西門前の大施餓鬼は注目に値する。朝鮮侵略の過程で闘死した兵士、特に朝鮮・明軍の兵士のための施餓鬼である。日本国家と宗教による不遇な死者の救済が、どのような主体と儀礼によって、どのような場と装置を通して行われてきたのか、いったんその歴史的な意味を考察したうえで、秀吉の大施餓鬼を考察する必要がある。

（４）最後に、薦度儀礼をキーワードに、絵画・儀礼・国家・宗教・社会を総合的・

横断的に考察する。その際、１６・１７世紀境の意味が問われなければならない。薦度儀礼そのものは各時代に存在する。仏教儀礼に限っても同様である。しかし明代水陸画が１６世紀半ばに甘露図に翻案され、１６・１７世紀境に熊野観心十界図に再翻案され、それぞれ朝鮮（韓国）・日本社会に定着していく意味を問わねばならない。

４．研究成果

本研究は最終的には一冊の研究書にまとめる予定で現在鋭意執筆中である。これまでにも研究の諸段階に応じて、いくつかの論文を公表している。また調査の過程で、１６世紀後半に遡る、これまで学界に未紹介の甘露図を日本で発見し、韓国国立中央博物館への寄贈の全過程にも関わった。以下、成果の主な点を箇条書きにして示す。

（１）熊野観心十界図は小栗栖健治『熊野観心十界曼荼羅』（岩田書院、2011）が出版され、良質な図版が手に入るようになった。甘露図についても、『甘露幀』（芸耕）・『甘露』（通度寺聖宝博物館）あるいは『韓国の仏画』全 40 巻などが出版され、現代にいたる甘露図の良質の図版が手に入るようになったが、甘露図の最初期の作例となる１６世紀のものについては、そうした作業がなお完結を見ていない。基本的にそれらが日本の国内にあるからである。本研究期間に研究代表者は韓国個人蔵の１点を除いて全ての作例を実見し、その絵相を詳細に調査することができた。前記したように、その過程において京都龍岸寺（浄土宗）で「唐絵」とされてきた甘露図を発見。韓国側研究者と共同調査を繰り返すなかで、この希有な作例の韓国国立中央博物館への寄贈が実現した。１６世紀甘露図の研究がこれからいっそう進展するであろう。

（２）その結果として、明代水陸画のなかでも毘盧寺壁画のように、多量の連幅ではなく、大画面に曼荼羅風に描かれたものが、甘露図の直接のルーツであることが判明した。連幅の水陸画においては仏菩薩・神々・死者などそれぞれの図像とその構成するシーンが画幅の際でトリミングされているが、壁画のような大画面ではそれぞれのシーンが脈絡なくつながってしまう危険性がある。そこで各シーンをスペース・セルの技法でいったん分節することになる。毘盧寺壁画の甘露図にその技法が典型的なかたちで残っている。スペース・セルは各シーンを分節すると同時に関係付ける。その画面構成法は、水陸画から甘露図を経てじつに熊野観心十界図にまで及んでいる。甘露図においては、水陸会という儀礼とその儀礼の実現に必要な大量の図像群をわずか１幅の画面に描き込むため、当然スペース・セルの技法が必須のものとなる。ここで確立された雲形によるセルが熊野観心十界図に継承され、１７世紀以降の様々な絵画に利用されていくことになる。

（３）水陸会関連経典や韓国東国大学・ソウル大学などで調査した水陸会マニュアルなどの考察から、甘露図の描かれた細部の意味が一層鮮明となった。導師・焔口餓鬼（鬼神）の所作や影向する七如来の図像などについてである。１６世紀の初期甘露図のなかには、導師が甘露の法水を撒くものと鬼神が撒くものとがある。水陸会マニュアルに従うなら、甘露の乳海は、導師の掌に幻視された盧舎那仏の種字から湧きだすものであるが、鬼神がこれを行うのは、それが観音の化身というのみならず、鬼神独自の信仰がその背後にあるものと考えられる。中国明・清代には鬼神のみを施餓鬼の信仰対象とした焔口餓鬼図が制作されており、その遺品が日本（京都六道珍皇寺・千葉観音教寺）に伝来している。それらの作例も調査し、水陸会関連経典（阿難説話群）から鬼神信仰が派生し、それが水陸画と共生しながら甘露図に取り込まれる過程を想定した。

（４）現在の韓国寺院の諸堂に掲げられた甘露図の調査から、寺院の宗教空間と霊壇との関係が明らかとなった。もちろん１６・１７世紀の宗教空間を再現する必要はあるが、その前提となる作業を行うことができた。たとえばソウル郊外の興国寺では冥府殿の本尊に向かって左の壁に甘露図を配置している。これが韓国仏教の三壇構造の霊壇にあたり、現在も信者が拝礼にやってくる。１６世紀の初期甘露図には画面の最下部に画記の残る作例もあるが、残念ながら朝鮮社会におけるかつての所蔵寺院を推測せしめるものはない。その点は韓国社会に伝来した１７・１８世紀の作例を、その寺院空間の宗教構造との関係から押さえ、モデル化しておく必要がある。基礎的な段階ながらその作業も始めている。

（５）　甘露図を受容した日本社会側の問題であるが、まずは１６世紀に至る日本社会の危機－天災・飢饉・疫病など－に際して、現実に七如来の顕現を幻視する水陸会の儀礼が、１５世紀の都市京都で、五山禅院主導で行われていたことを確認し、これを秀吉の大施餓鬼実修の前史とした。室町幕府が五山禅院に命じて国家的な施餓鬼儀礼を行っていたことは知られているが、その儀礼の場で他ならぬ七如来の顕現が確認されたのは、研究代表者の仕事が最初であろう。七如来を本尊とする水陸会・施餓鬼会が、中国明代・朝鮮・日本社会に共通して存在していたことは重要である。１６世紀の薦度儀礼は、やはり日本社会や朝鮮社会など個々の社会の孤立した問題ではなく、東アジアに通底する問題として再検討しなければならないのである。東アジアの国家・社会・宗教が死霊救済のための薦度儀礼に、どのようなスタンスで関わるのか、なお研究を継続する必要がある。特に一年前に東北大震災を経験して、いまにおいても膨大な死者の「救済」＝供養という課題を抱える日本社会では、これは喫緊の課題となる。

（６）　神話的に梁の武帝に遡る国家的な水陸会が、日本社会では「家」の施餓鬼に帰着する。これは秀吉の大施餓鬼と熊野観心十界図の矛盾するところである。国家的な薦度儀礼と個々の「家」における先祖の薦度儀礼があざやかに併存したのが１６・１７世紀の境の日本社会であった。その併存の問題を、熊野観心十界図の翻案＝誤訳の問題として考察した。水陸会関連経典（阿難説話群）から盂蘭盆会関連経典（目連説話群）への読み替えの問題である。もちろんこの翻案＝誤訳は当時の日本社会における民衆的な「家」の形成過程と関わっている。中国の水陸会を荘厳する大規模な水陸画から寺院内部においてバーチャルな水陸会を想定する甘露図。この変化のなかに、すでに日本的翻案のベクトルは萌芽している。朝鮮社会における甘露図の礼拝は決して国家的な課題への対処ではないのである。熊野観心十界図に至る翻案の過程を、明代水陸画から朝鮮甘露図にいたる翻案・変容の過程もふまえて考察した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

① 西山克「七如来の顕現－寛正飢饉と施食の風景」、『関西学院史学』、査読無、３８巻、２０１１、８３－１１２

② 西山克「朝鮮甘露幀と水陸会をめぐる断章」、小峯和明編『漢文文化圏の説話世界』竹林舎、査読無、２０１０、４６１－４８５

③ 西山克、太田昌子、大西広、小峯和明「絵の読み方－イメージ・テクスト・メディア」『文学』１０巻５号、査読無、２００９、２－５３（特に１７－２５が西山担当分）、

６．研究組織
(1)研究代表者
西山　克（NISHIYAMA　MASARU）
関西学院大学・文学部・教授
研究者番号：30145825

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：